令和6年度 青少年育成作文 優秀賞②

青少年育成推進協議会では毎年、小中学生を対象に作文と標語を募集しています。今年度の優秀賞と特別賞を紹介します。

深めよう南関町

南関第三小学校　六年　永清（ながきよ）　芯（しん）

いまぼくたちは、南関町の食べ物や歴史、文化財について調べています。そこで今日は役場で働いている遠山先生に話を聞きました。文化財に関してはとても興味があったので、楽しみにしていました。

まず最初に、国から指定されている文化財、御茶屋跡の話をしてくれました。ぼくは、御茶屋跡はその名の通り、御茶屋の跡だと思っていました。ですが本当は豊前街道を通っていたとのさまと、その家来たちが休けい、宿泊するしせつだと教わりました。

他にも、細川家が作ったこと、南関にしか残っていないことなど、詳しい内容がどんどんでてきたのでびっくりしました。

他にも県指定の文化財などいろいろな説明をしてくれました。その中でもびっくりして心に残った文化財は、南関第三小のハゼです。三小と言えば浦田理恵さんや金栗四三さんなど有名な人が通っていたので、それだけでもすごいと思っていたのですが、さらに文化財まであるなんてびっくりしました。この木は、豊前街道前にロウを取るために植えられました。ハゼの木の実はしぼるとロウが出ます。多い方がいいのでたくさん植えられたのですが今ある一本は、その中から奇跡的に残った木だったのです。

この他にもたくさんの文化財や歴史のことについて教えてくれました。ぼくは南関町に11年も住んでいるのに、まだまだ知らないことがたくさんあります。それをこれからたくさん調べていきたいと思います。

町を守っていくために

南関第四小学校　六年　北山（きたやま）　実生（みお）

私が、自然豊かな南関町を守っていくために行っていることは、ごみ拾いです。

私が、ごみ拾いを始めたきっかけは、家族で海に行ったときに砂浜にたくさんのごみが捨ててあって、せっかく遊びに来たのにあまり遊ぶ気にはならず、いい気分ではなかったからです。だから私はみんなが楽しく、安全にいい気分で遊ぶことができるような環境にしようと思って、家族みんなでごみ拾いをすることにしました。

ごみを拾い始めると、すぐにごみ袋がいっぱいになりました。ほんの少しの時間でこんなにたくさんゴミが集まるのはひどいなと思いました。それだけ捨てている人がいるということです。全部のごみを拾うことはできなかったけど、少しでも地域環境を良くすることができたと感じて、とてもいい気分になりました。

このような出来事をきっかけに、家のまわりのごみ拾いを一週間に一回するようになりました。ごみ拾いをする中で、わざわざ草むらのおくのほうに捨ててあったり、人の目が行きづらい場所に捨ててあったりしました。それを見るたびに私は、ごみを捨てているのもいけないけど、かくそうとする気持ちにいかりを感じながらごみを拾っています。みんながごみを捨てずに、逆にごみが捨ててあったら自分から積極的に拾うように心がけてほしいなと思いました。話に聞くと昔はもっとごみが捨ててあったそうです。それからすると、今の方が社会全体が環境を考えるようになってきたのかなと思います。でも、まだまだごみを捨てている人がたくさんいます。外国から来た人々が、「日本はごみのないきれいな国だ。」と言っていることをよく聞きます。でも実際はいろんなところにごみが捨てられています。本当にごみのない、きれいな国にするためにもごみを捨てないように呼びかけていきたいです。

だから私は、これからもごみ拾いを続けていくと共に、ごみを拾う活動をみんなに進めていきたいと思います。そして自然豊かな南関町をみんなで守っていきたいです。

他人と自分の違い

南関中学校　三年　岳（たけ）　晃輝（こうき）

みなさんは、身の回りに自分よりすごいと思える人は何人くらい思い浮かびますか。僕は数えはじめれば三十分はかかるくらいの人数が思い浮かんできます。僕がこのようなことを考えるようになったのは学校でやっているスピーチのお返しを書いている時でした。

ですが、最近また別の出来事があってから少し考えが変わりました。それは友達と会話している時でした。話している途中に友達が分からないと言っていた問題をおしえてあげたら、

「君は頭が良くてうらやましいな。」

と言われました。その友達は最初に言った僕が自分よりすごいと思う友達の一人で、僕はその友達に「僕より身長が高いし、運動もできるし、責任感もある。君の方が少し他の人より勉強ができるくらいの僕よりもすごいよ。」

と言うと、すかさず友達も

「そうかなあ、勉強ができることもすごいことだと思うけどね。」

と言いました。

その後、僕はもやもやしていました。しかし少し考えてみると気づいたことがありました。それは僕が無意識に自分の事を下げて考えているということです。僕は自分の中で、自分にできることはすごいことではなくて、自分にはできない事がすごい事だと思っていました。今まで自分がやってきた頑張りを、自分で否定してしまっていたことに気づき少しショックでした。

思い返してみれば、僕は自分と違う考えの人が多いと、自分の考えを隠したり、集会で手を挙げている人が少ないと、どうせ他に人が言ってくれるだろうと思って手を挙げなかったりと、周りに合わせていたり、自分にはできないだろうと決めつけてしまったりすることがありました。そういう決めつけの積み重ねが自分に自信が持てなくなり、自分を下げてしまう原因なのだと感じました。

いつも明るい友達なら自分に自信をつける方法を知っているかもしれないと思い、このことを友達に「どうやったら自分に自信が持てるようになるのかな。」

と聞きました。いきなりで友達はびっくりして

「いきなりそんなことを聞いてどうした?」と言って少し時間を空けて

「自分にはできないと思ってあきらめていたことをかたっぱしからやってみれば?」と言いました。確かにと思い、思い切り当たって砕けてみる事にしました。

まず、自分から話しかけることはないだろうと思っていたあまり話したことのないクラスメイトに話しかけてみることにしました。話しかけてみる前、いきなり話しかけたら怖がられるかななど考えていたけれど、話しかけてみると思ったより会話が弾みました。まだ普通に話しかける事はできませんが、前よりも気軽に話すことができるようになりました。

次は、集会で発表することに挑戦してみました。手を挙げてあたった時はびくっとしてしまったけれど、しっかり自分の思いを話すことができました。その後も集会の発表は続け、早口になってしまったり、言い間違いをしてしまったりするけど、自分にもやればできるのだと思うことができました。他にも、体育で普段よりも早いペースで走ったり、給食のおかわりをいつもより積極的にやってみたりしました。そのおかげで、自分に少し自信が持てるようになりました。

「自分が相手をすごいと思うところがあるように、自分にもすごいと誰かに思われるところがある。みんな良いところがあって、すごくないことなんて一つもない。自分がすごいと思っている人に胸をはって肩を並べることができるくらい自分にもすごい所がある。」

と考えるようになりました。

★特別賞

浴衣の思い出

南関中学校　三年　菊本（きくもと）　愛姫（あき）

それは、昨年の夏休みのことです。私の住んでいる町で「ぎおんさん」がありました。「ぎおんさん」とは、私の町で昔から行われている夏祭りのことです。私はクラスの友達と、ぎおんさんに行くことにしました。友達と、待ち合わせ場所、持って行く物などの予定を立てていると、友達からある提案を受けました。

「今度の祭りさ、みんなで浴衣を着て行こうよ。」

私は浴衣を着て行くことに決まったことを母に伝えました。すると母はハッとして、

「ごめん、お母さん浴衣着せてあげれん。洋服じゃだめかな。」

そう言う母は、とても悲しそうな顔をしていて、私はとてもじゃないけれど、そのときはイヤとは言えず、

「わかった。大丈夫だよ。」

と返事をしました。本音は着たいけど、母の右手が動かないのを知っているのに「着たい」とわがままを言って母を困らせたくはなかったし、「着たい」と言うと、もっと母の心を追いつめてしまうんじゃないか、浴衣を着せてあげられないと、悲しませたくはなかったという気持ちでした。

実は、母は生まれつき右手と右足が不自由で、小学二年生までは障害者手帳を持っていたそうです。見た目は障害のない人と変わらず、通常の生活ではあまり困らないそうですが、細かい作業や力仕事は主に左手のみで行わなければいけないので大変そうです。母は家族である私には、体のことをきちんと理解してほしかったそうですが、私は、母の手足のことは改めて聞いた訳ではなく、私が幼いころから自然と見聞きして知っていった感じなのです。

だから、本音は私もみんなと同じように浴衣を着てお祭りに行きたい気持ちでしたが、母の手のことで、私に対して着せてあげたいのにそれができない悲しみや、申し訳ないと思った母の気持ちを考えると、私の本音を口に出すことはできませんでした。

それから数日後、家に帰るとなんと浴衣が届いていました。母が注文してくれていたのです。開封してみると、その浴衣はセパレートタイプという、いわゆる上下二つに分かれている形の浴衣でした。私は諦めていた浴衣が着れると思うと、嬉しくて、嬉しくてたまりませんでした。でも母は、

「普通の浴衣を着せてあげれんでごめんね。でも、これなら練習したら着せれるけん。」

と謝るのです。

それから、夏祭りの日まで、毎日私にセパレート浴衣を着せる練習をしてくれました。そして祭り当日、練習の甲斐もあって私も浴衣を着て友達とお祭りを楽しむことができました。

母はきっと、自分の右手のことで悩んだのではないかと思います。私のために母が着せることができる浴衣を考え、たくさん探してくれたんだと思います。そして、何度も何度も清せる練習をしてくれました。私がみんなと同じ楽しい思い出を作れるよう、精一杯の愛情を私に注いでくれました。

私は今回のできごとで、何か問題にぶつかったとき、ただできないことに目を向け悲しんだりうらやましがったりするのではなく、どうやったらできるのか、どう努力すればいいのか、もしできないのならそれに変わる方法やアイディアはないのか、まず考え、調べて、探して、時には人に聞いて、試して、練習して、それらを繰り返して自分のベストに近づけていく。ベストまで行かなくてもベターにはきっとたどり着く。そういう母の考え方や行動はこのような努力の上に成り立っていることが分かり感謝の気持ちで胸が一杯になりました。

今年の夏まつりも、もちろん去年と同じ浴衣を着ました。この浴衣は夏祭りの楽しい思い出と共に、母の私を想う愛情がこもっている大事な浴衣です。ずっと大切にしていきます。そして、自分でも浴衣を着る練習をして、いずれ母の手を借りずに一人で着れるようになって母を安心させたいと思います。そして、今度は私が頑張って、母にも浴衣を着せてあげたいです。

お母さん、いつも私のために、家族のために頑張ってくれてありがとう。とても感謝しています。私もこれから努力して、優しく、だけど力強いお母さんみたいな人になりたいです。